

斎藤成雄

第三卷

秩父に革命の嵐吹く

秩父暴動事件

第三卷

秩父に革命の嵐吹く

秩父暴動事件

斎藤 成雄

近代文藝社

著者略歴

出身地 栃木県那須郡南那須町大字東熊田2084

齋藤^あ (著者実兄) TEL 0287-88-7851

現住所 神奈川県座間市入谷3-3485-1

本 名 齋藤成雄 TEL 0462-51-3517

既 刊 『ゆれうごく中学』近代文藝社

非行と現代中学教育問題を小説にまとめて描く。

第一巻『愛は死を超えて永遠に』近代文藝社

明治11年竹橋暴動事件の全貌を証すために描く。

第二巻『死すとも自由は死なず』近代文藝社

明治14年の政変、脱獄、加波山事件を描く。

秩父に革命の嵐吹く

1987年4月20日 第1刷

著 者 齋藤 成雄 (さいとう・よしお)

発行者 福澤 英敏

発行所 近代文藝社

〒151東京都渋谷区代々木2-23-1-406

(03) 370-7839 郵便振替東京7-68875

定 価 1,300円

印刷所 日本図書刊行会印刷部

製本所 小泉製本所

© 1987 Printed in Japan

ISBN 4-89607-985-X C 0095 ¥1,300 E

第三卷

秩父に革命の嵐吹く

——秩父暴動事件——

斎藤 成雄

目次

脱獄囚が秩父に入る……………	7
ノロメを食べる……………	18
道路はタダで造れるか……………	51
農民も武器を握る……………	82
明治十七年十一月蜂起する……………	106
棕神社への道は血ぬられた……………	144

大宮郷（秩父市）を占拠する……………173

本陣の崩壊……………189

信州への道……………203

死の弾丸のあらし……………225

警察の探索……………237

絞死台に消ゆ……………244

近戸川熊吉の獄死……………254

あとがき……………269

装幀 武井すみ江

第三卷

秩父に革命の嵐吹く

——秩父暴動事件——

脱獄囚が秩父に入る

秩父路は桑畑がどこまでもつづく道で、その道は峠へとのびきっている。高い山の頂上附近は秋の気配さえただよって、空には白い雲が流れていた。のどかな風景をながめながら中山清三郎は「なんと平和な地方だろう」と思った。

彼は汚れた手拭でほかぶりをし黒い野良着をきて追われるように急ぎ足であるいていた。眼ばかりきよろきよろしながらもどうか茨城から秩父まで無事に来られたことに満足し胸をなでおろした。

とはいふもののこの秩父にも革命が起きそうなのだからおだやかではない。十日前に日本で初めて加波山頂に革命の旗を高らかにかけ「自由の魁」を宣言したのが、いまや日本中の大問題になり、革命の壮士を捕縛しようと夢中の探索はつづいている。中山も爆裂弾の荷を背負って登った一人であるから油断はできない。増してや竹橋暴動事件の刑期中に松江の牢獄から脱獄し全国指名手配されている。

彼は勝田氏から信認状をもっている。関東の自由黨員はお互に革命のために連絡しあっていたようである。秩父にきてはじめてこんな山間の地方まで自由民権の運動が盛んに行われていることに改めて驚いた。

「平根っ古の寅市、坂本宗作、紺屋の善吉この三人は古い自由黨員でお互いに気心の知れあってい

るので何んなりと面倒みてくれるから、先づ三人のうち誰れでもいいから会って話しをつけるという」と言われていた。

中山は吉田村からしだいに山間の道にはいつて半根っ古の寅市の家を探しあて訪ねると「留守だ」といわれ、道を西の方へとそして坂本宗作の家を探しあて訪ねると「いまは留守だが、大宮郷に行っているの夜は帰る」と言われ、道をかえし紺屋の善吉の家を探しあるいた。立派な家がそうだというので訪ねると、うさんくさそうに「留守だ」と断わられた。

「あれ、おかしいぞ、揃えもそろって三人がいない」

はるか茨城の自由党員の勝田氏が知っているからには相当に古くから活動しているものとみてよからう。考えられることは家の仕事などしないで活動しているのかもしれない。これも一見は平和のようでも地下で革命の工作をしているのかもしれない。そのためにやたらには会わない。いまは群馬事件から福島、加波山と、日本中がゆれうごいている時期が時期だけに、権力側も警戒を厳重にし密偵を放って探索している。ましてや次は秩父かもしれないと判れば、夢中で弾圧をかけようと血眼になっているに違いない。やたらに歩いたのでは危険このうえない。足もとにいつ火がつくか判らない。

清三郎は頭をひねった。不思議にもそろって留守だというからには共通の理由がかくされているのかもしれない。考えられるのは警察の動きを警戒して、俺を密偵とでも勘違いしたのかもしれない。なにしろ秩父は生れて初めて訪れたのであり、言葉も違えば脱獄囚の眼つきをし、いつでも警戒している。

もしも、この考えが当たっていれば警察も活発に動いているのだらう。まして十日前の加波山事件の後であり、蜂起した人々の探索も厳しく追跡されている。

脱獄し自由な人間になれたのに寸刻の自由はなく絶ゆまない警戒になやまされ神経は鋭敏に刃物のようになっていた。

あてもなく歩くのは危険このうえないので忙しそうに歩かないではいられなかった。この時、神社でお祭りさわぎでにぎわっているのに気付いた。あるいは留守なのは祭礼の方に行ったのかもしれない、そう思うと自然に足は祭の方へとむかった。

杉の大木のある森の中に石段があり村人も何人か登っている姿も見える。清三郎も村人をよそおって高い石段を登ると、境内には土俵があり体格のいい力士がさらしのまわしをしめ東西に別れ、行司が力士の呼出しをかけては、ハッケヨイ。ノコッタ、ノコッタと気合を入れた大相撲をやる。そのたびに大勢いる観戦中の村の衆は拍手喝采ではやしたて大騒ぎとなる。

清三郎は村人が草相撲に夢中になっている姿に何年ぶりかの平和なくつろいだ気分になり、自分の脱獄囚であることも忘れ、力一番に夢中で取組む姿に見とれ、村人と一緒になって拍手をした。相撲の合間に村人の交わす話題に注目していた。

「一年前までは歌舞伎を楽しむことができたのに、草相撲でがまんするとは情けないな」

「なあに、相撲も若者の気晴しになるし、体にもいい。田代さんや井上さんもいるだろう。あの人たちは高利貸に、利息を負けさせようと、高利貸の家を毎日一軒一軒あるいて交渉しているそう
だ」

「そう話されたにしても用心棒をかこっておくような高利貸だ。悪どえことはなんでもやる連中だ、とても旨くゆく筈もあるまい」

「でも暴落つづきで、このままだと飢え死やのたれ死も出るぞ。背に腹はかえられない。そんな時に交渉してくれる人がいるのは有難いことだ」

「そうだ、そのとおりだ。なんでも十年据置きで四十年賦にしてくれ、と歩いているらしい」

「それ、本当か、まるで返さなくともいいと言わぬばかりじゃ負けてくれまい」

「なあに、それをしてくれなけりゃ、打こわしてやるぞ。という殺し文句があるんだ」

「そうか、そうこなくっちゃ。おれたちは後についているんだ。やってやろうじゃないかね」

「そのとおりだ。いくらでもやってやる。殺されるのを黙って見ているわけにいかないものな」

「勿論よ、そのとおりだ」

「二十年前も同じよ、あの頃も一揆をやったから良くなった。あの時のことを忘れられないんだ。高利貸など村の衆が団結すればなんでもないんだ」

清三郎は驚いた。草相撲を楽しんでいるだけでなく一揆をやろう、という工作が白昼堂々とやられているのだ。道理で農作業が忙しいのもすておき、働き盛りの若者が集っていかにも相撲を楽しむかに似せかけ裏では一揆の相談までしている。いかにも秩父の人々は茨城あたりでは見られない光景に違いない。

なにかわけのわからない興奮を憶えて胸騒ぎを意識した。とはいふもののわからない土地をみだりに歩くわけにもいかない、村人の動きも相当しられているものとみななければなるまい。当然、警察も嗅ぎまわっているよう。

その時に行司の呼出しに一段と大きな拍手が湧いた。

「近戸川熊吉」と声がかかると「関取!! まってました」という声が飛交う。成程、期待にたがわず、実につよく次々と倒してゆくのにちっとも疲れを見せない余力のあるあたりは「関取」としての貫録も十分だった。

彼は相当に人気者らしくたくさんファンもいる。集っている人たちの全員から声援が飛んでいる。清三郎はなにか不思議な光景であった。他のつよそうな若者よりも中年の男にどこに魅力があるのか謎の人物に感動をうけた。それも束間に若者をバツタ、バツタ倒した後におどろくような口上を述べた。

「俺は若い人を倒しても、ちっとも嬉しくない。借金があつて苦しい。こんど倒すのは高利貸だ。これは俺一人じゃどうにもならない。みんなでやろう」と、声を張り上げると、一斉に山にこだまする声でハネ返った。

「おー!! やろう!」と、清三郎は度肝つぶすほどに驚いた。と同時にあんなことを言っても平気なのだろうか、これだけ人が集ったのだから中には密偵もいるのではないだろうか、なにしろ密偵にされるといくらかの金を定期的に受取り当局に報告する義務を負うことになり、金の切目は縁の切目といわぬばかりに、不景気で飢えるよりも金をもらう方が勝ちとばかりに兄弟でも密告する。それは実に恐れられている。

あるいは弱い者の味方であり困っている人のためには犠牲になっても平気なのだという義侠心が旺盛なのかもしれない。多分そうであろう。そのために人気もあり相撲も強い。そう思うと清三郎も勇気が湧き、三人の留守の理由を聞いてみようと思った。

土俵から汗をかいておりてくるのを待って声をかけることにした。近寄ると大きな体格なので圧倒されそうになった。

「この中に坂本宗作さんはいませんか」と、見上げるようにして声をかけた。なにやらげんそうな顔をむけてきた。

「なにか用かね」と、言って、いるともいないとも言わない。やっぱり警戒していると思った。

「実は茨城からわざわざ尋ねてきたのですが、家にいなかったのです」

「そうかね、郡の役所に陳情に行っている」

「あ、そうですか」

「茨城から、来なすった。それでは加波山事件は知っているかね」

「ええ」と、あいまいに返事した。真つ昼間であり、どこに密偵が張っているか判らない。やたら
のことを喋っては危険性がある。

この時、熊吉はなんとなく暗いかげのある男のように思われ、よからぬ予感がしてならない。もしかすると密偵ではないかと思われた。おそらくこの男は密偵に間違いない。そう考えてかからな
いとこちらの手の内を探索されたら大変なことになる。

関東一斉に蜂起をするためには加波山事件のようなへまなことはできない。大規模にやるからには当然、ここは権力との闘いになる。そうなると警察や軍隊との戦闘になることを覚悟しなければなら
ない。軍隊には大砲もあるからには、こちらも農民という国民の大多数に依拠し蜂起するのだから、関東
というとてもない燎原に火がつくようなものであるからには、手がつけれなくなる
だろう。

そうなるといかに軍隊が出ようが、大砲を引出したにしても農民に砲をむけられるものではある
まい。とはいふものの農民にもそれ相当の武装しなければならぬ。

一斉蜂起を組織するのは中核に自由党は頼れないからには困民党を組織し拡大しながら組織する
方法をとっている。いまや木筒ではあるが大砲も造ることに成功した。これには並大抵の苦勞では
ない。幸い秩父には「秩父の夜祭り」を盛大にやるために花火を打上げる技術が昔から伝承されて

いる。花火の大きいのを打上げるのを応用して造った。

いまのところは未だ当局には秘密のうちに着々とすすめられている。そんな手の内を探られたら巨大な計画は破産してしまう。そこで熊吉はあたりさわりのないようなことを喋った。

「いまは松方財政の緊縮で農家は苦しんでいます。なにしろ西南役後のダブついた金を吸いあげるというながら途方もない税金の取立てですからね。米の暴落に始る農村の不況は深刻ですよ。それに加えてアメリカの不景気のために糸価の大暴落ですから、これはひどい前の年の半値で買い叩かれる。これが最大の悲劇だね。

それで景気のいい時には高利貸から金を借りても返せたが、こう不景気では返せない。それでも税金の差し押えをされれば高利貸に泣きついて借りる。借りればたちまち高い利息がつきまとう。それで坂本さんたちは伊藤郡長になんとかしてもらおうとして陳情しています」

「そうでしたか」

熊吉は一気に喋ったが密偵なら次々と探りの質問してくるものと思ったのに、あっさりと話を切ってしまった。そのためにかえって不思議な人物のように思われた。

「遠方から来られたのでは大変でしたね。親類でもあるんですか」

「別にないんですよ」

「それじゃ、お困りでしょう」

「なかに馴れていますから」

「そういいのこしてそそくさと出てゆく後姿を熊吉はじっと見ていた。

夜遅くなればいるという坂本家を訪ねると会うことができた。清三郎は信認状を見せて加波山事

件の知るかぎりを話した。

「実は茨城から密偵が来た。と聞いたがこれで安心しました」と、坂本はそつ齒をむき出して笑って、秩父の情況を話していたが、明るく驚くべき秘密をあかした。

「群馬事件などが起っていた頃は、落合寅市と、この坂本と高岸善吉の三人はいつでも一緒に伊藤郡長の所に、税金を負けて貰うことと、高利貸があまりにも暴利をむさぼるので取締ってほしい。村人と共に嘆願に何回も行った。きょうも、大宮郷まで出掛けたのにだめでした。

こうなったら武装蜂起以外にないわけですよ。あんたは茨城の勝田氏も保障しているので言っても差支えないと思うから面白い話しをしましょう。木筒の大砲を秘密に造っているんですよ。木の中をくりぬいて空洞にし木のまわりを竹でからんで爆発しても割れないようにする。火薬を詰め弾丸を詰めて敵陣にぶちこむんです」

「弾丸は鉄ですか」

「鉄では製造できない。まあせいぜい石でも詰めて爆発すれば敵陣は攪乱する」そういうと、またもやそつ齒をむき出しにして笑った。

「加波山事件には鯉沼九八郎が爆烈弾を作って驚かしたが、木の大砲とは驚いたね。実は俺も近衛砲兵隊にいたので鉄の大砲なら知っていますが、農民の知意とは驚きました」

「砲術の心得があるんですか。それならなおさら困民軍の陰の参謀でもやって貰うかね」

「またもや坂本の表情はほぐれた。清三郎は秩父の農民は一丸となって蜂起のためには木筒の大砲まで考案するという。全く夢のような話しをする坂本のそつ齒の表情にどれくらい勇氣の持主であるように思われ、彼のような農民が無数に秩父にいとすればたしかに蜂起も可能なのだろうと思った。と同時に鯉沼九八郎が苦心惨憺な思いで爆烈弾を造り腕まで飛ばす大怪我をしたが、大砲とも